

伊藤俊一（監），隈元庸夫，久保田健太（編）

PT・OTのための測定評価 DVD Series 6 整形外科的検査

田 平 隆 行
(西九州大学, 作業療法士)



本書は、PT・OTのための測定評価のシリーズ6作目である。5作目までは、ROMやMMT等、身体運動機能についての基礎的な測定評価であったが、今回は、診療科に特異的な検査・測定法の紹介である。作業療法において、整形外科疾患は、整形外科病院をはじめ急性期、回復期、生活期すべてのステージで出会う疾患群であり、特に高齢者では有病率が高く、生活に直接支障をきたしやすい。

まず、総論で整形外科疾患の検査における面接、視診と触診、留意点を述べたうえで、頭部・頸部・体幹、上肢、下肢それぞれの検査法が示されている。各検査は、検査方法をわかりやすく概説していることはもちろんであるが、検査の意義、適応、注意点についても明確に記載されており、学生や経験年数の少ないOTにありがちな「検査法は理解しているが結果の解釈や意義が不明である」といった点について配慮されている。紹介されている検査法は、作業療法国家試験の範囲ではあるが、講義の中で十分に演習できて

いたかどうか自身でも振り返るよい機会となった。

本書は、整形外科的検査法を正確で具体的な写真とDVDを用い、視覚的に整理させているため大変貴重であり、講義や実習前演習等に活用しやすい。整形外科領域の検査名の多くは、最初に発表した医師等の医療者の名前や運動の名称がテスト名となっており、カタカナが多いため症状と関連して覚えにくい印象がある（学生のころの私もそうだった）。編集の隈元氏も指摘しているように、同じテストでも別名が用いられることもあるようなので注意しておきたい。

最近、野球や農作業をする機会が増えた私も肩や膝が悲鳴を上げることがあった。Drop armテストやYergasonテスト、Apleyテスト等の検査を受け、疼痛出現や反応を身をもって体感した。詳細は触れないが正確な肢位や方法の重要性をあらためて知ったのも事実である。隈元氏も検査手法の再現性や検査中の対象者の動きや反応を注意深く観察することの重要

性を指摘している。

作業療法では、これらの検査を実施し、原因を推察すると同時に、日常・社会生活行為のどのような場面に支障をきたす可能性があるのかを想像できること、また逆に日常・社会生活行為を丁寧に観察し、支障をきたす行為の原因を探るための検査の選択ができること、その双方の視点が重要である。維持期や生活拡大期のOTにとっては、慢性的な整形外科疾患を有する対象者を担当することが多いが、これらの検査を忘れかけている可能性も不定できない。われわれの役割の一つである生活行為のマネジメントをしていくためにも、行為が変化したときの背景としてこれらの検査手法を用いてチェックし、行為の代償や遂行強化のプログラムの見直しを行うことがあろう。本書は、このようなOTの再学習としてもお勧めの1冊である。

B5判 120頁 3,800円＋税
三輪書店 刊
☎ 03-6801-8357